

「他人と異なる存在でありたい」という願望も「他人と同じでいたい」「人に合わせておきたい」という心理も人間の心の一面にすぎない。その意味で問題の英文は人間の心の両面に言及しているだけで、大切な視点を欠いていると私は考える。大切な視点とは、誰もが本質的に他人と異なる存在であるという事実だ。

今、老若男女を問わず、ほとんどの人がスマートフォンを持ち歩いている。わずかの時間を見つけては、それを取り出し、操作し、所構わず自分の世界へに浸っている姿を目にする。こういう状況の中にと、スマートフォンを持たないことは奇異なこととして非難の目にさらされているかのようだ。一方で、人はたいてい「自分は他人と違う」「自分は特別だ」と思いたいという心理を抱えている。

しかし、重要なことは、他人と同じであることを自慢したり、異なることを非難したりすることではない。だれもが他人とは異なる存在である。大切なのは、その事実を自覚することだ。例えば、世の中には他人に替わってもらえないことに溢れている。病気がそうだし、試験がそうだ。替わってもらいたくても、替わってあげたくてもできない。生と死も他人に代行してもらえない。自分の人生もそうで、結局、自分自身が一番よく知っているのは自分である。人は他人とは分かち合えない部分を内包している。その意味で人は孤独な存在でもある。

そして、このように考えるとき、ある事実突き当たる。自分がそうであるように、他人も誰にも理解されない部分を自分の中に抱えているということだ。そして、私は、そういう孤独な部分があるからこそ、人は他者に共感できるのではないかと推測する。異なる部分が、重なる部分を人に気づかせ、共感に導く。社会全体でみると、これは現状に苦しんでいる人や困っている人を支えようとする精神的な基盤になる。きっと社会を動かす原動力になっている。

現代の日本社会には、富めるものはますます豊かになり、貧しいものはそこから抜け出せないという構造があるという。また、他人を蔑むヘイトスピーチなど他人を傷つける言葉が書籍やネットに溢れている。私は、このような社会にあってより強調されるべきなのは、誰もが自分と異なる存在であることに気づき、そこに共感する感性なのだと考える。

